

# 英語を母語とする日本語学習者の談話分析：話し手の心理的視点と表現に関する考察

著者名(日)	佐藤 史子
雑誌名	言語科学研究：神田外語大学大学院紀要
巻	3
ページ	43-58
発行年	1997-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00000308/">http://id.nii.ac.jp/1092/00000308/</a>

# 英語を母語とする日本語学習者の談話分析<sup>1</sup> —話し手の心理的視点と表現に関する考察—

佐藤史子

## Discourse analysis of English native-speakers as Japanese language learners : The study of the speaker's psychological viewpoint and expression

Chikako Sato

This paper compares the discourse of English native-speakers in Japanese to that of Japanese native-speakers. Because of the inter-connection between languages and their cultures, the way of expression in English is different to the way of expression in Japanese. For example, while English native-speakers tend to describe an event exactly as it occurred, Japanese native-speakers describe it from their individual perspectives. To illustrate this, I have focused on passives and verbs of giving, which have original characteristics in Japanese. I argue that one of the reasons why the discourse of English native-speakers tends to be unnatural is this difference in viewpoint of the speaker that exists between Japanese native-speakers and English native-speakers.

【キーワード】 事実志向型 立場志向型 話し手の心理的視点 受身 授受補助動詞

### 1. はじめに

中・上級の日本語学習者は文法的にも意味的にも正しい文を発話しているにも関わらず、その発話を談話の一部としてみたとき、日本語母語話者（日本語話者）の談話と比較して、何か違和感のある発話として感じるがよくある。その原因の一つとして、視点の問題が考えられる。視点の問題とは、一つの発話を行うときの視点の取り方が言語によって異なっているために起こる問題である。そこで、本稿

## 言語科学研究第3号(1997年)

では談話の不自然さの原因の一つとして話し手の視点、特に話し手の事柄に対する親近感を示す視点の置き方を取り上げる。

この視点の取り方とは、水谷 (1985) に述べられている、「事実志向型」と「立場志向型」という文づくりの傾向と関連していると考えられる。これら二つの文づくりの傾向は、事柄の捉え方によって、事実をそのまま事実として表現する「事実志向型」の文と話し手の立場から事柄を捉えて表現する「立場志向型」の文とに分けられている。つまり、事実志向型の文の場合、動作主に視点を置いて事柄を表現し、立場志向型の文の場合、話し手の視点から事柄を表現すると考えられる。水谷によれば、英語は「事実志向型」の傾向が強く、日本語は「立場志向型」の傾向が強い。水谷は、日本語においてこの「立場志向型」を示す表現として、受身や授受動詞を挙げている。つまり、受身や授受動詞は日本語の視点の置き方の傾向を端的に示す表現であり、話し手の視点から表されていると考えられる。そこで、本稿では英語にも同様の言語形式がある受身と日本語特有の表現である授受補助動詞を取り上げることにした。

以下では、研究対象である受身及び授受補助動詞の特徴について先行研究を概観し、それによって立てられた仮説を提示し、その仮説を検証した結果を述べていく。

## 2. 研究対象

### 2.1. 受身の特徴

受身は英語と日本語両方に存在する言語形式であるが、その使用方法は異なっている。そこで、まず受身本来の特徴を明らかにし、次に英語と日本語の受身がそれぞれどのように異なっているかについて述べていく。

受身については様々な研究者が、様々な言語レベルにおいて研究している。本稿では、社会言語学的観点から研究している Brown & Levinson (1978, 1987) と言語の普遍性 (language universals) に着目し、分析を行っている Comrie (1981)、言語類型論の枠組みの中で、プロトタイプ・アプローチを用いて受身のプロトタイプ研究を行っている Shibatani (1985) の受身についての研究を取り上げる。これら三人の研究者は受身をそれぞれ異なった観点から研究しており、全ての研究を比較することはできないが、三人共動作主について言及しているのでその点について比較し

## 英語を母語とする日本語学習者の談話分析

ていく。受身の構造において、Brown & Levinson (1978, 1987) は動作主の削除が、Comrie (1981) は動作主降格が、Shibatani (1985) は動作主の非焦点化が行われていると述べられている。つまり、対応する能動文でもっとも注目を集める主語位置にあった動作主が、受身文では主語位置よりも階層的に低い位置に移行または削除されるということを述べている。そして、そのことにより発話における動作主の重要性が低いと認識されるようになる。動作主の重要性が低くなった発話は、全ての人から等距離な客観表現として考えることができるだろう。このように普遍的な受身の特徴は動作主に注目を集めない、客観表現であると考えられる。

この特徴を踏まえ、英語と日本語の特徴を見ていく。英語には一般的に、能動文から受動化変形を受けて作られる「be+過去分詞」の形を持つ受身と「have/get+目的語+過去分詞」の形を持つ受身の二種類があると言われている。その違いについては Lakoff, R (1971) に be 受身 (be-passives) と get 受身 (get-passives) の比較によって示されている。Lakoff によれば、be 受身 (be-passives) とはニュースなどで多用される表現であり、get 受身 (get-passives) とはある事柄に対する話し手の態度を表す表現である。しかし、get 受身 (get-passives) は、日本語の受身のように被害の意味を表せるだけでなく、使役や完了の意味を表す場合があると述べられている。そこで、本稿では受身の普遍的な特徴に従った、客観表現をする場合に多用される be 受身 (be-passives) を英語の受身と考えることとする。

次に日本語の受身についてであるが、Howard and Niyekawa-Howard (1976) に示されるように、直接受身 (direct passives) と間接受身 (indirect passives) という統語面から二種類に分けられているのが一般的である。しかし、本稿では語用的な役割から受身を二種類に分けた Tokunaga (1989,)、徳永 (1994, 1995) に従う。徳永は「客観表現としての受身形の使用」と「話者の心情的視点を表す主観表現としての受身形の使用」とに分けている。前者は普遍的な受身の特徴及び英語の be 受身 (be-passives) の特徴と同じであるが、後者は日本語特有の受身の特徴ということになる。つまり、日本語には英語にはない受身の用法があるのである。この受身の用法は被害叙述においては、話し手の被害や迷惑の気持ちを表すことが出来る。このことから、被害叙述における英語母語話者（以下、英語話者）と日本語話者の談話について(1) のような仮説1を立てた。

- (1) 仮説1： 日本語話者が、ある場面における迷惑や被害を表すために受身

## 言語科学研究第3号(1997年)

を使用するのに対して、英語話者は迷惑や被害を感じた場合でも受身を使用しないのではないか。

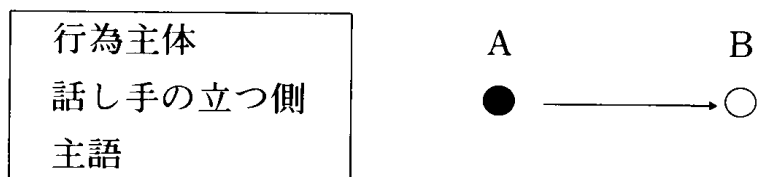
## 2.2. 授受補助動詞「てあげる・てくれる・てもらう」

授受補助動詞「てあげる・てくれる・てもらう」とは、授受動詞「あげる・くれる・もらう」と共通の性質を持つ日本語特有の表現である。そこで、まず先行研究によって授受動詞の特徴を明らかにする。次にその特徴に付加される、授受補助動詞に特有の特徴について述べていく。

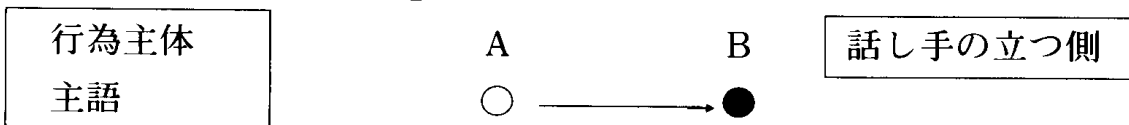
授受動詞「あげる・くれる・もらう」は、英語において物の授受を表す“give, receive”とは性質を異にしていると大江 (1975) に述べられている。英語の“give, receive”は主語名詞句が与え手 (giver) であるか、受け手 (receiver) であるかによって使い分けられている。それに対して日本語の授受動詞「あげる・くれる・もらう」の使い分けには英語と同じように主語名詞句が関与しているだけでなく、人称の方向指示 (deixis) も関わっていると述べられている。人称の方向指示を決定しているのは話し手であるから、これは森田 (1977) に述べられているように、話し手の立場が関与していると考えられる。

森田は授受動詞の使い分けを、「事物の授受に預かる「行為主体」は誰か」、「話し手の立つ側はどちらか」「「与え手 (A)」と「受け手 (B)」のどちらを主語とするか」という三点を用いて(2)-(4)のように表している。

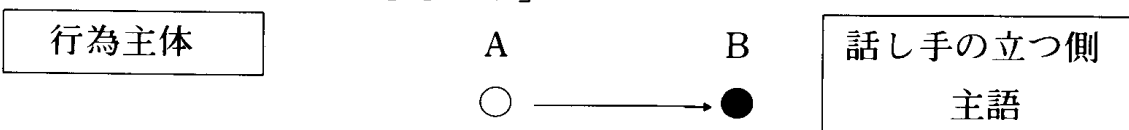
### (2) やる「AはBにCをやる」



### (3) くれる「AはBにCをくれる」



### (4) もらう「BはAから／にCをもらう」



上の「話し手の立つ側」は大江の「視点の軸」と同様のことを指していると考え

## 英語を母語とする日本語学習者の談話分析

られる。つまりこれらは話し手が視点を置いている場所を示している。この話し手の視点の置き方には次の(5)のような人称の制約がありそうである。

## (5) 一人称＞二人称・三人称

「与え手」と「受け手」の一方が一人称であった場合、(5)の制約があてはまるが、それ以外の名詞句が二つである場合は、かなり相対的であると大江に述べられている。この場合、話し手が心理的に近いと感じた方を「話し手の立つ側」とする。例え、話し手にとって両者共、心理的に遠い人であっても、話し手はどちらかを近い人として定めると考えられる。

このような話し手の選択は、日本の社会学的概念である「内・外」に影響を受けているとTokunaga (1990)に述べられている。つまり、授受動詞の使い分けを決める時に話し手がもとにする概念は「内・外」であると考えられている。

以上のように、日本語の授受動詞は英語の授受動詞と比べて、話し手の立場から動詞を決定しなければならないという難しさがある。そして、その根底には「内・外」という概念があると考えられている。

このような授受動詞の特徴に加えて、授受補助動詞「てあげる、てくれる、てもらう」には更に意味が付加される。授受動詞は物の授受を表すための表現だが、授受補助動詞は恩恵的行為の授受を表す表現である。大江によれば、これらは「誰の行為が誰に対して恩恵的であるかと話し手が感じるかによって三つの語彙の中から一つが選ばれる」。つまり、話し手の感謝の気持ちを文の中に含め入れることになる。

このような使用法は更に日本語学習者にとって難しいと考えられる。そこで、授受補助動詞に関する(6)のような仮説を立てた。

- (6) 仮説2：日本語話者がある場面の利益の供与を表すために授受補助動詞を使用するのに対して、英語話者は利益の供与を感じた場合でも授受補助動詞を使用しないのではないか。

以上の二つの仮説を検証するために考案した調査について次に述べていく。

### 3. 調査

#### 3.1. 調査方法

上で述べた仮説を検証するために、自然な長い談話を採集することができるス

言語科学研究第3号(1997年)

トリー再構成法 (SLA研究会 (1994)) を選んだ。

調査は英語話者に対しては日本語と英語の二種類の談話調査を行い、日本語話者に対しては日本語の談話調査のみを行った。英語話者の談話調査はVarádi(1983)に従い、日本語→英語の順で行った。

### 3.2. 調査材料

3.1.で述べた方法の調査材料としては被害場面を数カ所含む "Curious George" (邦題『ひとまねこざるときいろいろいぼうし』) を使用した。この調査材料である絵本は英語話者には英語版を、日本語話者には日本語版を使用した。

### 3.3. 被験者

本稿では英語話者、日本語話者、各25名づつを被験者とした。以下ではそれぞれの被験者の選定基準について述べていく。

日本語話者の被験者としての条件は(7)のような条件である。

- (7) a. 日本語を母語とする者
- b. 両親とも日本語を母語とする者
- c. 13歳未満の期間に海外に滞在していない者

この条件を満たした日本語話者 25 名の内訳は次のようである。まず、性別は男性 12 名、女性 13 名である。そして年齢は 20 代が 19 名、30 代が 5 名、50 代が 1 名である。

次に英語話者の被験者としての条件を(8)に示す。

- (8) a. 英語を母語とする者
- b. 日本での滞在期間が1年以上である者
- c. 日本語教育機関において学習時間が 300 時間以上の者

この条件を満たした英語話者 25 名の内訳は次のようである。性別は男性が 18 名、女性が 7 名である。また、年齢は 20 代が 14 名、30 代が 8 名、40 代と 50 代が共に 1 名づつ、無回答が 1 名である。国籍はアメリカ人が 20 名、イギリス人が 1 名、オーストラリア人が 3 名、カナダ人が 1 名である。

このような英語話者 25 名と日本語話者 25 名の計 50 名を被験者として調査を行っ

## 英語を母語とする日本語学習者の談話分析

た。

### 3.4. 文法テスト

英語話者である被験者に対しては、受身と授受補助動詞を既に学習しているかどうかを調べるために文法テストを行った。文法テストは三セクションからなっている。セクション1は授受補助動詞の選択問題であり、セクション2と3は受身の問題である。セクション2は埋め込み文の形式をとり、埋め込み文の部分が受身形を持つ文を問題文としている。問題は主文の主語と述語及び埋め込み部分の主語と述語動詞を辞書形であらかじめ与えておき、埋め込み部分を生成してもらうという問題である。セクション3は能動文から同じ意味の受身文を生成することを求める問題である。セクション1が3問、セクション2が4問、セクション3が3問の計10問である。

このテストの結果は以下のようなものである。10点満点のうち、10点が4名、9点が2名、8点が3名、7点が5名、6点が2名、5点が3名、4点が5名、3点が1名である。

なお、このテストの合格ラインは1セクション1点の計算により3点とした。

### 3.5. 手順

調査は英語話者は95年9月20日から95年11月28日までの約2ヶ月間、日本語話者は95年12月23日から96年4月8日までの3ヶ月半の間に行った。この期間中に被験者の都合の良い時間に被験者の指定した場所で行った。従って、場所は職場、神田外語大学大学院研究室、自宅、飲食店と様々であった。しかし、いずれも被験者のくつろげる場所ということを前提とし、被験者と調査者との距離は常に1メートル以内とし、二人とも椅子に座り、被験者側に録音用のテープレコーダーを置いた。

自然な談話を収集するため、調査を行う前には雑談をし、打ち解けてから調査を始めた。調査は、母語で書かれた本を渡し、読み終わった後に日本語でストーリーを話してもらいたい旨を日本語で指示した。そして被験者に黙読してもらった。その後、絵本と交換に絵本の挿し絵を印刷したカードを渡し、日本語でストーリーを話してもらった。その後、絵本のストーリーの中で主人公であるジョージをかわいそうに思った場面について質問をした。日本語話者に対してはここで調査が終わりとなるが、英語話者に対しては3.4.で述べた文法テストを行った。



### 言語科学研究第3号(1997年)

このようにして行われた調査の分析について次に述べていく。

## 4. 分析

### 4.1. 分析方法

3章で述べたような調査によって録音したデータは全て文字起こした。それを元に次のような観点から分析を行う。

仮説1は、3.5.で述べたように被験者に主人公であるジョージをかわいそうに思った場面について行った質問の答を元に、各被験者がその共感場面で行った表現を取り出し、集計し、検証する。

仮説2は被験者が授受補助動詞を使用した発話文とその場面を取り出し、検証する。

### 4.2. 分析結果

仮説1、2について、英語話者と日本語話者の日本語による談話を分析した結果を述べる。

#### 4.2.1. 仮説1

まず、仮説1の検証を行う。ここで検証する仮説1とは、英語の受身と日本語の受身の用法の違いから立てられた次のような仮説である。

- (9) (=1) 仮説1：日本語話者が、ある場面における迷惑や被害を表すために受身を使用するのに対して、英語話者は迷惑や被害を感じた場合でも受身を使用しないのではないか。

この(9)の仮説1を4.1.の分析方法に従って検証する。右の表1、表2は、その場面でどのような表現を使用しているかを英語話者、日本語話者別に示したものである。

## 英語を母語とする日本語学習者の談話分析

表1 共感場面での表現（英語話者）

表 現	回 数	割 合 (%)
なし（能動文）	30	69.8
受身	5	11.6
受身+てしまう	2	4.7
てしまう	6	13.9
合 計	43	100

表2 共感場面での表現（日本語話者）

表 現	回 数	割 合 (%)
なし（能動文）	8	28.6
受身	2	7.1
受身+てしまう	6	21.4
てしまう	12	42.9
合 計	28	100

次に、表1と表2の割合を英語話者と日本語話者を対応させて表3に示す。

表3 共感場面での表現（英日比較）

表 現	英語話者	日本語話者
なし（能動文）	69.8	28.6
受身	11.6	7.1
受身+てしまう	4.7	21.4
てしまう	13.9	42.9
合 計 (%)	100	100

このような表現の出現率をまとめた表3から分かるように、主人公に共感した場面において、英語話者が使用した表現は能動文が圧倒的に多い。それに対して、日本語話者が能動文を用いたのは半数以下である。むしろ、「てしまう」という表現

## 言語科学研究第3号(1997年)

を多用している。この「てしまう」という表現を日本語話者が最も多く使用することは予想外のことであり、本調査前は、共感場面においては、受身が最も多く使用されるのではないかと予測していた。しかし、このような表現が行われたことは、「てしまう」が持つ意味によって起こったと考えられる。森田(1977)によれば、「てしまう」を使用することによって、「しばしば、“してはならないことをする”“具合の悪い状態になる”の意味が付加される」という。このような意味を感じるのは話し手であるので、この表現も受身同様、話し手の心理的視点を表す表現と考えることができる。

この「てしまう」は、最も多く使用された能動文との差は大きい、英語話者においても2番目に使用された表現である。これは、テキストによく出てくる表現であると共に、能動文と同じ主語と述語を持つ文に「てしまう」をつけて、悪い状況であることを表すことが出来るからだと思われる。つまり、主人公に対する共感を示す表現方法として、受身より「てしまう」の方が構文的に簡単であると考えられる。

以上のように、英語話者の69.8%が能動文を使用し、13.9%が「てしまう」を使用している。共感場面において、英語話者は受身を使用しない傾向が見られる。つまり受身に対して回避 (avoidance) ストラテジーを使用していると考えられる。

また、「受身」の欄を見ると、英語話者の方が使用している割合が高いが、日本語話者は受身の使用が低いのではなく、「受身+てしまう」の形で使用することが多いようである。この表現は、話し手の心情的視点をおく表現である「受身」と“具合の悪い状態になる”という意味を付加する「てしまう」の結合形であるので、この表現を使用することによって、話し手の感情を強く表現できるのではないかと考えられる。従って、日本語話者はこの表現を多く使用したのではないかと推測される。

次に仮説1に示されている表現である「受身」について見ていく。表4に、被験者が受身を含む「受身」「受身+てしまう」を使用した割合をまとめた。

## 英語を母語とする日本語学習者の談話分析

表4 「受身」「受身＋てしまう」の使用率

	英語話者	日本語話者
割合 (%)	18.2	28.5

日本語話者の使用は、英語話者の使用の二倍までは行かないが、やはり英語話者より多い割合を示している。ただし、受身を使用するこの割合は日本語話者においても低いので、次にこれらの表現と「てしまう」の表現を併せて考えていく。

上で述べたように「てしまう」は悪い状態を表す表現であり、「受身」は話し手の情動的視点を表す表現である。いずれも話し手の心理的反応を含んだ表現として考えることができる。従って、このような要素を含んだ「受身」「受身＋てしまう」「てしまう」は好ましくない状況の叙述において、話し手の状況に対する被害、迷惑という心理的反応を含んだ言語表現と考えられる。表5は共感場面において、これらの言語表現を用いた割合を示す。

表5 共感場面で話し手の心理的反応を示した割合

	英語話者	日本語話者
割合 (%)	31.8	71.4

このように、日本語話者のほとんどがこれらの心理的反応を示す表現を使用していることがわかる。それに対して、英語話者でこれらの表現を使用したのは、31.8%の人だけである。つまり、日本語話者は主人公に共感した場合、その心情を言語表現に含めるのに対して、英語話者は主人公に共感した場合でも、その心情を言語表現に含めることが少ないと考えられる。そこで、(9)の仮説を修正して、(14)のような結論を提出する。

- (14) 結論1： 日本語話者が、ある場面における迷惑や被害などの叙述をする場合、話し手の心理的反応を含む言語表現を使用するのに対して、英語話者は迷惑や被害を感じても、その話し手の心理的反応を含む言語表現を用いることが少ない。

## 言語科学研究第3号(1997年)

## 4.2.2. 仮説2

ここでは、仮説2の検証のために、英語話者と日本語話者の談話における授受補助動詞の使用について見ていく。本節で使用する仮説2とは英語は日本語の授受補助動詞に対応する表現を持たないことにより立てられた、以下の(15)のような仮説である。

- (15) (= (6)) 仮説2：日本語話者がある場面の利益の供与を表すために授受補助動詞を使用するのに対して、英語話者は利益の供与を感じた場合でも授受補助動詞を使用しないのではないか。

この仮説を検証するために、英語話者、日本語話者がそれぞれどのような場面で授受補助動詞を使用したかについて調べた。物語には26場面あるが、被験者が授受補助動詞を使用したのは次の9場面である。場面5では英<sup>2</sup>：0名、日：1名、場面6<sup>3</sup>では英：0名、日：11名、場面9では英：0名、日：1名、場面10<sup>4</sup>では英：2名、日：9名、場面12では英：0名、日：2名、場面14<sup>5</sup>では英：1名、日：0名、場面21<sup>6</sup>では英：0名、日：6名、場面25<sup>7</sup>では英：1名、日：7名、場面26では英：0名、日：1名である。

このように、授受補助動詞を英語話者は4回、日本語話者は38回使用している。この使用は実に様々な場面で行われていることがわかる。

次に、このような場面において三つの授受補助動詞のうち、どれが使用されたかについて表6に示す。

表6 授受補助動詞の使用回数（授受補助動詞別）

授受補助動詞	英語話者	日本語話者
「てあげる」	1	15
「てくれる」	1	15
「てもらう」	2	8
合 計	4	38

表6から分かるように、日本語話者は「てあげる」と「てくれる」という授受補助動詞を多く使用している。そして、この談話調査においては、主人公ジョージに

## 英語を母語とする日本語学習者の談話分析

視点を置く表現として「てくれる」と「てもらう」の二つがあるが、「てくれる」の方を多用している。それに対して、英語話者は「てくれる」より「てもらう」を多く使用していることがわかる。実際には、英語話者の使用回数は少なすぎるので、このような比較をすることには適していないと思われるが、日本語話者の「てくれる」の使用回数と比較して、英語話者の「てくれる」の使用が低いので、次のようなことが考えられる。英語話者は授受補助動詞の使用は困難であり、特に「てくれる」の使用に関して困難を感じるのではないかと考えられる。

上で述べたように授受補助動詞が使用された回数は、英語話者が4回、日本語話者が38回である。この回数を元に、各被験者25名の平均回数を求めた数値を下の表7に示す。

表7 授受補助動詞の平均回数

	英語話者	日本語話者
使用回数	4	38
平均回数	0.16	1.52

この表からわかるように、英語話者は約6人に1人の割合でしか使用していない。一方、日本語話者は1人1.5回の割合で使用していることになる。もちろん、授受補助動詞の使用は、日本語話者においても個人差があり、一度も使用しなかった者もあったが、ほとんどの日本語話者が使用しているので、表7のような平均回数を示している。

以上の考察から、(15)で示した仮説2は妥当と考え、少々修正を加えた(16)のような結論2を提出する。

- (16) 結論2: 日本語話者がある場面の利益の供与を感じた場合、授受補助動詞を使用するのに対して、英語話者は利益の供与を感じた場合でも授受補助動詞を使用することが少ない。

## 5. 考察

ここでは、上で提出した二つの結論が導かれた要因について述べていく。

## 言語科学研究第3号(1997年)

まず、結論1は日本語話者は共感場面において話し手の心理的反応を示す言語表現を使用する傾向が強いのに対して、英語話者はこの傾向が弱いことから導かれた結論である。

話し手の心理的反応を示す言語表現として上で「受身」「受身+てしまう」「てしまう」を挙げたが、中でも受身の使用率が低かったので、ここでは「受身」を使用しない要因について述べる。

「受身」を使用しない要因としては二つ考えられる。一つは1.で述べた文づくりの傾向の違いである。水谷 (1985) によれば、財布を盗まれるというような被害叙述において英語はその事柄の動作主を主語位置において表現する「事実志向型」の文で述べると言う。それに対して、日本語は話し手の立場からその事柄を表現する「立場志向型」の傾向があり、被害叙述においては被害者を主語位置に置き、受身の構文で表現すると言う。この理由から、共感場面において受身ではなく、能動文を多用したと考えられる。

もう一つの考えられる要因は2.で述べたように、受身の使用法の違いがある。英語話者にとって受身は客観的に事柄を述べるための表現であるという意識があるのだろう。それに対して、日本語の受身はTokunaga (1989, 1990)、徳永 (1994, 1995) に述べられているように、話し手の心情的視点を表す主観的な表現をすることができる。この二言語の受身は使用時において全く正反対とも思えるような性質を示すのである。このことによって、英語話者は日本語の受身を使用しないと考えられる。

4.2.1.の分析結果と上で述べた要因から、英語話者は受身を学習しても使用を避けていると考えられる。つまり、コミュニケーションの際に受身に対して回避 (avoidance) ストラテジーを使用していると思われる。

次に結論2であるが、これは英語話者と日本語話者の授受補助動詞の使用率の差から導かれた結論である。英語にない授受補助動詞の概念を、日本語において使用することはかなり困難なようである。英語話者と日本語話者の使用率の差は歴然としていた。その低い使用率の中で、本調査の調査材料の絵本の主人公である猿のジョージに利益が及ぶ場合は、それ以外の人物に利益が及ぶ場合よりも授受補助動詞が使用しやすいようであった。この場合「てもらう」と「てくれる」が使用されるのだが、日本語話者は「てくれる」を好むのに対し、英語話者は「てもらう」を

## 英語を母語とする日本語学習者の談話分析

好んで使用していた。構文的にも主語に利益を及ぶ人を置く「てもらう」の方が使用しやすいと思われる。水谷の言うように、「てくれる」は非用<sup>8</sup>が多いのではないだろうか。

しかし、本調査の結果は特に「てくれる」だけの使用率が低かったわけではなく、授受補助動詞全てにおいて使用率が低かった。3.4に示した文法テストにおいては、受身より正解率が高かったのであるから、知識としてはあるのだが、発話時に困難をきたすのであろう。以上の結果から、授受補助動詞においても受身同様、回避ストラテジーを使用していると考えられる。

以上のように、日本語においては受身と授受補助動詞はある事柄をありのままの事実として表現するのではなく、話し手の視点から表現しなければならないので、「事実志向型」傾向の言語を使用している英語話者にとっては使用時に困難を感じるようである。従って、これらの文法項目を学習した場合でも、回避ストラテジーを使用して会話を切り抜けていると考えられる。

## 6. まとめ

本稿では、日本語の「立場志向型」の文である受身と授受補助動詞を調査することによって、英語話者の談話の不自然さの要因を明らかにすることを試みた。日本語の受身と授受補助動詞の特徴から立てられた仮説をもとに行った調査から得られた結論は次の(17)のような結論である。

## (17) 結論

- 1：日本語話者が、ある場面における迷惑や被害などの叙述をする場合、話し手の心理的反応を含む言語表現を使用するのに対して、英語話者は迷惑や被害を感じても、その話し手の心理的反応を含む言語表現を用いることが少ない。
- 2：日本語話者がある場面の利益の供与を感じた場合、授受補助動詞を使用するのに対して、英語話者は利益の供与を感じた場合でも授受補助動詞を使用することが少ない。

以上の受身と授受補助動詞についての結論は、これらの文法項目はどちらも話し手の心理的視点から表現しなければならないことから導かれたものである。「事実志向型」の傾向が強い言語を使用している英語話者にとって、話し手の視点から事



言語科学研究第3号(1997年)

柄を述べることは非常に難しく、このことが談話の不自然さを導いていると考えられる。

参考文献

- 大江 三郎 (1975) 『日英語の比較研究 ―主観性をめぐって』 南雲堂
- 徳永 美暁 (1994) 「日本語使役文のプラグマティック分析」 津田日本語センター (編) 『言語理論と日本語教育の相互活性化』
- 徳永 美暁 (1995) 「言語表現と文化 ―日本語と英語―」 『異文化コミュニケーション研究』 第7号 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所 97-116
- 水谷 信子 (1985) 『日英比較 話しことばの文法』 くろしお出版
- 森田 良行 (1977) 『基礎日本語』 角川書店
- Brown, P. & Levinson, S.C. (1987) *Politeness*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Comrie, B. (1981) *Language Universals and Linguistic Typology*. University of Chicago Press.
- Shibatani, M. (1985) "Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis", *Language*, Vol.61 No.4: 921-848.
- Tokunaga, M. (1989) "Paradoxical Function of Passives in Japanese Pragmatics." *The 16th LACUS Forum* : 435-448 . Linguistics Association of Canada & the United States.
- (1990) "Linguistic Manifestation of the Japanese Sociological Concept, uchi 'insider' and soto 'outsider' , *The 17th LACUS Forum 1990* : 487-497. Linguistics Association of Canada & the United States.
- Varádi, T. (1983) "Strategies of Target Language Communication : Message Adjustment", Fearch C. & G. Kasper (ed.) *Strategies in Interlanguage Communication*. Longman : 79-99.

- <sup>1</sup> 本稿は1995年6月に神田外語大学大学院に提出した修士論文に手を加えたものである。論文指導の徳永先生をはじめご助言をいただいた諸先生方に心から感謝したい。
- <sup>2</sup> 英は英語話者を表し、日は日本語話者を表す。
- <sup>3</sup> 場面6はおじさんが猿のジョージを袋から出し、動物園に連れていくことを話している場面である。
- <sup>4</sup> 場面10は海に落ちたジョージを船員達が助ける場面である。
- <sup>5</sup> 場面14はジョージがおじさんと一緒におじさんの家へ行き、一泊した後、目覚めるとおじさんが電話をしている場面である。
- <sup>6</sup> 場面21はジョージがお姉さんが弟に風船を買っているところを見た場面である。
- <sup>7</sup> 場面25はジョージとおじさんが無事に再会し、その後おじさんがジョージの代わりに風船屋に風船代を払う場面である。
- <sup>8</sup> 水谷 (1985) によれば、非用とは表面には現れないが、母語の影響を強く示すものであると言う。